

# アインナの日常復光

荻野アインナ 4



静岡にはおでんの屋台が並ぶ一角がある。まっ黒な煮汁に、一本百円の串が林立している。各人勝手に手を伸ばし、ビールを片手にハフハフする。

その夜、店は貸し切りだった。杉井さんと仲間たち、荻野と仲間たち、計7人でカウンターが埋まった。

全員が目が一瞬、壁のテレビにくぎ付けになった。焼津の市役所でクールビス、というささやかなニュースだ。

職員全員が着用した「魚河岸シヤツ」は、寅さんと清水の次郎長が合体した、としか形容のしようがない。公の場に、いい意味での俠客感が漂っていた。

そのとき気付いた。周囲のボランティアには、なぜか静岡出身者が多い。大震災が来るのはウチ、と思いついていたのが東北に連れて、「申し訳ない」と恐縮(?)する県民性がある。

なかでも杉井さんたちは、ボランティアのプロと呼ぶべき存在だ。杉井さんはCL(建設的な生き方)の日本における先駆者である。CLは心理療法を基にした教育法。仲間たちと実践に励んだ結果が長いボランティア歴になった。

ボランティアという外来語は面はゆいが、俠客と言いかえれ

## 「次郎長一家」と子ども、被災地へ

### 瓦礫撤去から新たな一歩

次郎長親分の卓見は拙著『大震災 欲と仁義』共同通信社でも紹介したが、踏み込んだ話を伺った。

次郎長一家は石松さんを中心に山梨県の大月にあるフリースポーンがずりおちて「半テ

はしつくりくる。以下、杉井さんを次郎長に、仲間(鈴木さん、海野さん、天野さん)を大政、小政、森の石松にたとえる。

クールを支援している。生徒は不登校と引きこもりの子らが中心だ。

震災後、彼らを連れて、一家は瓦礫撤去のボランティアに赴いた。

片道6時間をバスに揺られた。その間、子どもたちはマスクに帽子を深々とかぶり、言葉もなく固まっていた。

作業が始まって、驚いたのは次郎長のほうだった。

少年は不登校で、ほとんど言葉が発しない生活を送ってきた。普段が裏返ったような、猛烈な頑張り、次々と贅辞が寄せられた。

「この子が人に褒められたのは初めてです」

子どもを迎えに来た少年の母が涙を流した。

写真の少年を親分は天使と呼ぶ。眺めているだけで心が洗われる。

「この子らのビュアさが、彼らを生きにくくしているんです」

瓦礫の撤去後、子らに言葉が戻り始めている。特殊な体験が、彼らに一歩を踏み出すきっかけを作った。

被災地は、これまでの価値観が崩れた現場でもある。「単一の価値観しかない」と、人間は狂う」と親分は説く。

瓦礫撤去は作業の前と後で景色の色があらさまに変わる。片付いた、という結果が明瞭で、人の役にたてた達成感がある。

社会的既定路線からこぼれ落ちた人たちが、「想定」の範囲内で右肩上がりを目指した跡を片付ける。マイナスかけるマイナスの先のプラスは、人間らしい社会であるはずだ。

しかも体を動かすのはメンタルヘルスに良い。

瓦礫の撤去率は、まだ数%。阪神大震災と比べ、範囲が広がるぶん時間がかかる。これだから、と腕をまくり、次郎長一家と緑茶割りで乾杯をした。

聞いていて、人ごころはなくなってきた。私は鬱系の片づけられない女である。震災の前と

次回8月17日に掲載します



花が咲いた (イラスト 影山千絵)

(作家・慶応大教授)